

町小だより

令和7年
7月23日
No. 699
御免町小学校

体験をとおした学びは深い学びへ

校長 土田 利康

大人の思いとは裏腹に、子どもたちが楽しみにしている夏休みが始まります。子どもたちは、やりたいことをたくさん考えて、指折り数え待っていたことと思います。小学校の時期だからこそ、また、まとまった休みだからこそ、様々なことにチャレンジしてほしいと思います。

しかし、今の子どもは、夏休みも、いや夏休みだからこそ習い事などで忙しいということが少なくありません。一方、どこへも行かず、ゲーム機と向かい合っている子どももいます。時代の変化とはいえ、どちらにしても少しかわいそうな過ごし方に思うのは私だけでしょうか。

私の小学校時代の1日は、まずはカブト捕りで始まりました。朝、明るくなる前に家を出て、「カブトの木」と呼んでいた木の樹液に集まっている時を狙いました。木を揺らしたり蹴ったりすると、ポトッと音を立てて落ちてきます。その音がした方を探すと、カブトムシやクワガタムシを捕獲することができました。いつも成功するわけではありませんが、カブト捕りをしながら、独特の臭いと特徴ある幹や葉の形の木にカブトムシが集まることや湿った土地に多くいること、明るくなると捕れなくなることなどを、体験しながら覚えていきました。

また、昼間は友達と川で泳ぎました。上流に向かって懸命に泳いでも少しも進まず、逆に下流に向かって泳ぐと、魚のような気分が味わえました。足が届かない所に気を付けながら泳ぐうちに、川の深い所や浅い所の特徴に気付き、水の面白さや怖さ、力強さを体験・体感しました。ほかに、庭の杉の木に「やぐら」を組んだり、海で貝を捕ったり、中条や月岡までサイクリングをしたりしていました。一人で電車に乗って、長岡市の友達の家まで遊びにも行きました。どれも今、自分が子どもの安全管理に携わる立場として薦められないことばかりです。昔は良かったのかどうかはさておき、振り返ると、今の自分の感覚や考え方の基となる貴重な体験です。足の裏に貝が当たる感触や海の底の砂の冷たさ、風の匂い、季節に咲く花の鮮やかさ、越後平野の壮大さなどは教えられて理解するものではありません。

先にも述べましたが、時代が変化し、子どもを取り巻く環境が大きく変わりました。昔のやり方は通用なくなり、周りの大人が関わり続けるにも限界が見えます。そこで、今の子どもに必要なのは、自分自身で判断し対処する力です。「ここまではよい」「これはダメ」「ここは安全」「あれは危険」という感覚は、大人が教えるだけでは追い付きません。子ども自身が体験をとおして身に付けたり、類推する思考を使って汎用性のある見方や考え方を身に付けたりしていかなければならないのです。

学校で教える学習内容等を定めている「学習指導要領」では、予測困難な未来を生き抜く子どもには、「主体的・対話的で深い学び」をとおした「生きる力」が必要だと記されています。夏休み、子どもは学校をしばらく離れます。各家庭では、今、学校で行っている「自ら考え」「対話し」「振り返る」機会をたくさん用意していただきたいと思います。その中で、体験をとおした学びもあると深まりますね。

